

鈴木 武右衛門 1995-2002

鈴木 武右衛門*

BUEMON SUZUKI 1995-2002

Buemon SUZUKI

序文

人は石を見てどう感じるか？硬い，ざらざらしている，冷たい，重そう．色々あるでしょう．私が石を彫るようになったのは，イタリアの作家，マリーノ・マリーニの制作態度に共感するところがあったからです．マリーニは粘土（モデリング）やテラコッタの作品に石の技法，木の技法などを取り入れた制作．又，木の作品にモデリングの技法を取り入れた制作等で互いに取り入れあっていました．そして，立体だけでなく平面においても，油絵，デッサン，エッチングなどを制作．平面の技法も立体に取り入れる表現技法．このように，色々な技法をクロスオーバーするユニークな制作方法に共感したのです．これは色々学ばねばならず，時間がかかります．彼はイタリア美術の伝統の上に基盤を持っていて，彼もそれを自覚していました．私が石を彫ることの遠縁にギリシャ彫刻があり，それはブロンズ（青銅・モデリング），大理石とあり，彫刻を始めるきっかけでした．だからモデリングの中でも，石を彫ることに違和感はありませんでした．

石の性質と技法

石は石特有の不思議な魅力を持っています．

それは，素材としての原石を前にして，圧倒される様な力を感じます．原石が出来てからの長い時間の経過が石の中に自然の息吹と無限のようなものが感じられるからです．

石の種類は多く，その中で彫刻の材料として，古今東西，多く用いられてきたものを見ますと，石の硬度，色合い，密度などによって選ばれているようです．

私がよく使う石材は，硬い黒御影石ですが，これは花崗岩（グラニット）の仲間であり，硬く，彫るのにかなりの時間を要します．でも，それは出来上がったものの耐久力は優れていますし，磨いて光沢が出ます．そしてその光沢は消えにくいのです．

中間の硬さのものは，大理石（マーブル），小松石，等が彫刻としてよく使われます．日本の風土においては湿気が問題です．特に大理石は水を吸うので，石の表面・その少し内側にカビが生え，洗っても落ちません．特に大理石・砂石などは，日本の風土に適さないと思います．

さらに軟らかい石となると砂石（サンド・ストーン），白河石，石灰石等があります．軟らかい石の表面がぼそぼそで石の光沢が出ないし，風化しやすいです．私は石の質が均等で亀裂の入りにくい，くせない，肌のこまかいものを選びます．その意味で黒御影石を使います．

石は割れる時，まっすぐに割れます．江戸

*すずき ぶえもん 文教大学教育学部

時代からさく石機が導入される昭和初期まで、飛び矢という技法で石を割っていました。その石割の技法を用いて作った作品が①です。この作品は原石を3個に飛び矢で割り、その内の中側の石を彫り磨き、割ったものを再度接着した作品です。飛び矢の形の面白さと、原石と磨いた石とのコントラストの面白さを表現しました。

石の割り方・割れ方。それらは石らしさを表現する方法の中の1つですが、制作態度として石らしい表現を重要視した作品の中から、それと相反する表現として、石の素材感を無くす表現があっても良いのではと思います、石の肌に彩色をもって素材感を消すことを思いつきました。そこで木彫りの伝統的な技法、金箔張りで石の素材感を消し、ブロンズのように見せることを思いついたのです。作品②④⑤⑥⑦

作品③は、①と②との間の作品で飛び矢と金箔張りが同居しています。この作品の前景と背景に分けて、前景はあたかも飛び矢で割ったような表現、背景は飛び矢で円い形を2個に割り、その中間を掘り、磨き、金箔張りした後、接着したもの、これは石の性質の表現方法をコントラストで表現したものです。作品④と⑤は石の台座、⑥と⑦は木の台座。違う素材を組み合わせたらどうなるか、実験しました。

動物彫刻

動物の彫刻は多摩動物園が近くにあったので、早くから動物を制作していました。作品⑧⑨⑩。デッサンをし、粘土で模型を作るという方法で制作。粘土で制作したものと石で制作したものの差は、粘土は限りなく細く作れる。石は削る限界があるということです。細く作れるということは、モデルに限りなく近づくことですが、彫刻の要素・量感・空間・素材感・構成力・抽象性・単純化などが、薄れていきます。作者は彫刻のどの要素を重視

するかで作風が決まるものです。モデルにそっくりな物を作りたければ、モデルから型を取れば、良いのです。これは、エジプト時代からおこなわれています。私は型取り（リアル）でなく、リアリティー（らしさ）を求めているのです。

ローマというイメージ

作品⑩⑪⑫⑬⑭は、ローマをテーマに、ローマのイメージを形にしました。⑩は立体における遠近法と視点の混合を使い、ブロンズの天使を配置して、異質の素材でコントラストの面白さを狙ったものです。⑫は大理石と黒御影石とのコントラストを表した作品です。⑬は黒御影石と木とブロンズの3種類の素材を混ぜた作品。さらに金箔を部分的に配しています。西洋的なテーマに東洋的なテーマの混合を試みる作品です。

石に彩色、金箔張り、異種素材混合などは、十数年前から研究されだしました。それは、素材の多様化の波があったからです。この多素材の作品研究はまだまだ日が浅いせいか、今までに無かった新しいフォルムの発見や、新しい表現方法に研究の面白味があります。

引用文献

¹ 十日町石彫シンポジウム実行委員会：十日町石彫シンポジウム1995-1997, 1998, p. 43

² 「芸術の森・彫刻シンポジウム」実行委員会：「芸術の森・彫刻シンポジウム」記録誌, 1998, p. 10

<注> 田辺武光氏の四行詩 3編



① 「源義経と浄瑠璃姫」愛知県鳳来寺参道 H170×W300×D200 黒御影石 1995

連山遠望

田部 武光

山また山を目でなぞり
指でなぞり手でなぞり
ペンでなぞりレンズでなぞり
それでもおさえきれぬ、この想い！



② 「Sleeping Beauty・夏」60回新制作展 H100×W140×D60 黒御影石・金箔・漆 1996



③ 「故郷の遠き山の呼び声」十日町市彫刻シンポジウム H300×・W200×D260
白御影石・黒御影石・金箔・漆



④ 「ねころぶ」61回新制作展 黒御影石・金箔・漆



⑤ 「舟民」 沖縄県芸術の森彫刻シンポジウム H300 白御影石・金箔・漆

時

田部 武光

果てしない、掴めない、「時」よお前は何もの？
風のようにいて風ではないもの、まるで違うもの？
平安の道綱母のノンフィクションを閉じる
門叩きの音が今も聞こえる、この不思議さは？



⑥ 「飛べない沈黙・歯車」個展 ちばぎんアート・ホール H35×W130×D80
黒御影石・金箔・漆・木 1999



⑦ 「飛べない沈黙・門」個展 ちばぎんアート・ホール H190×W150×D70
黒御影石・金箔・漆・木 1999



⑧ 「あざらし」 個展 日本橋高島屋彫刻コーナー 黒御影石・大理石



⑨ 「大地の使者」 個展 日本橋高島屋彫刻コーナー 黒御影石・セメント

鈴木 武右衛門 1995-2002



⑩ 「ローマ酔夢行」個展 ギャラリーせいほう H230×W200×D35 白御影石・大理石・木 2001

休憩場所

田部 武光

グラン・ブルーヴァールの木製ベンチ
ヴォーージュ広場の同じく木のベンチ
ヴァンセンヌ森なかの草の上
僕のどん底時代の休憩場所です。



⑩ 「サンタンジェロ城」個展 ギャラリーせいほう H25×W60×D12 黒御影石・ブロンズ 2001



⑫ 「visone」第64回新制作展 黒御影石・大理石 2001



⑬ 「ala」 第65回新制作展 H230×W200×D200 黒御影石・白御影石・木 2002